

福井県内科医会学術講演会座長コメント

『不眠症治療の新たな知見～オレキシン受容体拮抗薬の位置づけと使用経験～』

福井循環器病院 呼吸器科 若林 聖伸

近年、現代人の約30%以上が入眠困難、中途覚醒、早朝覚醒、熟眠困難などいずれかの不眠症状を有し、産業事故の増加、生産性の低下、医療費の増加など、さまざまな人的および社会経済的損失をもたらすことが明らかとなり、公衆衛生学上の大きな課題の一つとなっている。とりわけ50歳以上の中高年層では、不眠症はうつ病や生活習慣病との関連も指摘されており、睡眠薬の処方率が近年増加を続けることが問題となり、2013年6月に「睡眠薬の適正な使用と休薬のための診療ガイドライン」が作成された。そこで今回、睡眠障害治療の第一人者である愛媛大学医学部附属病院睡眠医療センター長の岡 靖哲先生より以下の講演を頂いた。

現在の不眠症治療の主流は、脳の睡眠系であるGABAの作用を増強させることにより、鎮静作用で睡眠系を誘導するベンゾジアゼピン受容体作動薬（非ベンゾジアゼピン系も含めて）が一般的であったが、高齢者への使用は転倒、骨折、前向き健忘などの副作用や多剤併用、高用量化が問題となっている。1998年に視床下部のニューロンから産生される神経ペプチドであるオレキシンが日本人によって発見され、覚醒の調整に重要な役割をしていることが明らかとなった。オレキシン受容体拮抗薬はオレキシンの受容体への結合をブロックすることにより、過剰に働いている覚醒システムを抑制することで、脳を生理的に覚醒状態から睡眠状態へスイッチを切り替える。このような睡眠と覚醒のメカニズム、神経伝達物質、体内時計系、睡眠恒常性維持機構についてわかりやすく解説していただいた。

オレキシン受容体拮抗薬は、従来の薬剤とは違う作用機序であり、新たな不眠症の治療薬としてより質の高い睡眠を得ることにより、生活習慣病（糖尿病、高血圧、心血管疾患など）の改善も含めて、今後の症例の集積により更なる安全性と有用性が期待される。